

激闘？ 年越し三十連戦！（仮）

The A'-Team

洗い終わった洗濯物の処理は、可能な限り迅速でなければならぬ。

そうフェイスマンは信じていたし、生真面目なコングも、もちろんそう思っていた。

だがしかし、世の中にはそう考えない輩もいるものである。そんな輩第一号は言うのだった。

「そんなもな放っておいて、ちょっとお前さん、コーヒーなんぞ淹れちゃくれませんか。ネスカフェじゃなくて、香り高い豆のやつを。」

リビングから香気なことを言われて、洗濯籠を抱えてベランダに足を一步踏み出したばかりのフェイスマンは、首だけをリビングの方へ向けて作り笑いをしている。

「それ、急ぎ？ 今じゃなくちゃダメ？ 俺、洗濯物干したいんだけど。」

飽くまでも和やかに。爽やかな日差しはピフォア・ムーンの雰囲気壊さないように。

「急ぎですとも。あたしがコーヒー飲みたいって言ってんだから。」

飽くまでも剛情に。百戦錬磨のツワモノたちのリーダーである威厳を崩さないように。

「あ、でもゴメン、豆切れてるんだ。洗濯物干し終わったら、ハンニバルの好きな豆、買ってくるよ。」

それ以上ぐだぐだ言われないよう、フェイスマンはピシヤリとベランダに続く窓を閉めた。

「むっ。随分といい度胸だな、フェイス。」

ハンニバルの額にやや怒りマークが浮かび上がり、瞬時に消えた。そして、とても悪い笑みを浮かべると、大股にキッチンへと立ち去っていった。

一方、閉めたサッシの向こうのフェイスマンはと言え

そんな不穏な空気に気づきもせず、パンパン、とシーツを広げて振っている。

「んっ、いい天気。これなら気持ちよく乾きそうだね。いくらニュービーズが部屋干しでも匂わないって言うても、やっぱり天日で干したシーツの寝心地ときたら最高だし。」

鼻歌など歌いながら、次々と洗濯物を干していく。

最後の一枚を干し終え、フェイスマンが充実感に満ちた顔で額を拭ったその時。

「ちょっと！ あんた何やってんのよ！」

階下から響く怒号。見下ろせば、マンションの下の遊歩道で、妙齢のご婦人がフェイスマンを見上げている。

「このマンションはベランダ干し禁止だって、何度言ったらわかるのよ！」

ご婦人は、続けて叫んだ。

「どうも済みませーん。知らなかったもので。」

「知らなかったって、あんた誰？ そこはジェイソンの部屋でしょう？」

「留守番の従兄弟です。」

一度干した洗濯物をあたふたと取り入れながらフェイスマンが叫び返した。

「従兄弟がいるなんて聞いてないわよ？」

「ちょっと姻戚関係が複雑で……。」

「まあいいわ。ジェイソンの家の人なら、言っておきたいことがあるの。これからそっち行くんで待ってらっしゃい。あ、洗濯物は取り込んでね！」

ご婦人はそう言うと、足早にフェイスマンの視界から消えた。

フェイスマンは、あたふたと洗濯物を取り込むと、湿ったままのシーツを抱え、部屋に戻った。

「どうしたフェイス、雨でも降ってきたか？」

「違反だったみたい。」

「違反？」

「そう。このマンション、外干し禁止。」

「禁止と言われても、部屋の中にシーツ干す場所なんか

「だから、シーツ乾くまで禁煙ね。」

「禁煙だど！」

「うん、シーツが葉巻臭くなっちゃったらやでしょ。」

「嫌なもんか！」

「俺は、嫌。」

シーツを一旦、洗濯籠に戻して、フェイスマンはそくさと玄関に向かった。

「ナイロンロープ、パンにあったよね？ ちょっと取ってくる。多分、俺のいない間に苦情が来ると思うから、よろしく。」

「何だど？ 苦情？ 何の？」

片手にインスタントコーヒーの壺を、もう片手にココアの缶を持ったハンニバルが玄関のドアに顔を向けた時、そこにはもうフェイスマンの姿はなかった。

そしてハンニバルがそのポーズのまま思いを巡らせる数十秒が過ぎ、「ピンポピンポピンポ」とドアチャイムが鳴った。

ナイロンロープを抱えたフェイスマンが戻ってきた時、例のご婦人の姿はなく、ハンニバルはぐったりとソファに沈み込んでいた。

「……フェイス、お前の知り合いのジェイソンってのは何者なんだ？」

「ん？ ジェイソン？ うーん、ちょっと変わり者かな。モンキーほどじゃないけど。」

そう話しながらも、ナイロンロープを壁に釘で打ちつける。人様の家だつてのに。

「あたしゃ一体、そのジェイソンってのにとつて何なんでしょね？ 一応、叔父のような者、とは言っておいたんだが。」

「となると、ハンニバル、俺の親父？」

「お前はジェイソンの従兄弟か？」

「そう言っちゃった。」

「恐らく、お前の親父さんとあたしが兄弟なんですよ。」

「ああ、そういう手もあるか。でも、そんな関係の俺とハンニバルが、どうして一緒に住んでるわけ？」

反対側の壁にロープを打ちつけ終えたフェイスマンは、まだロープが余っているので、方向を変えて、先端

の届く壁に三たびロープを打ちつけた。

「意気投合したんじゃないですかね。」

とハンニバル、すっかり他人事。

「ときにフェイス、シート干し終わったら、ネスカフェでいいからコーヒーを淹れちゃくれませんかね？」

さっきの威厳はどこへやら。

「インスタントならハンニバルだって淹れられるだろう？」

今度はナイロンロープを雑巾で拭いていくフェイスマン。

「そりゃもちろん、熱湯さえあれば淹れますよ。熱湯さえあればね。もしくはヤカンが。」

「ああ、ヤカンね。今朝コングが握り潰しちゃったんで、ないんだ。鍋で何とかならない？」

「それが、鍋も見つからんですわ。」

「そう言えば、モンキーが被ってたっけ、鍋。じゃマイクロープオーブンでお湯沸かせば？」

「やってみましたともさ。」

「うん、俺もやってみた。壊れてたよね。ゴメン、瞬間忘れてた。ええと、それじゃあね、コーヒーメーカーに水入れて、スイッチ入れるの。そうするとお湯がポタポタ出てくるから、その下にカップを置く。」

「……何かもつと手っ取り早い方法はないのか？ 駐車場でランタン使って湯を沸かすとか。」

「そんなことしたら、また苦情が来るよ。あ、そうだ、苦情って何だった？」

シートをロープにかけながら、フェイスマンはハンニバルの方を振り返った。

「それだ。」

ハンニバルは思い出すだけでもうんざりといった表情で、ソファからフェイスマンを仰ぎ見た。

「洗濯物は外干し禁止だそうだ。」

「それはもう聞いたよ。だから今、室内干しの用意してあるんでしょ。」

「洗濯とシャワーは夜十時まで、朝は八時からだそうだ。」

「そりゃ初耳だ！」

シャワーはバッチリかかる時間帯である。

「コングやモンキーにも言っとかなきゃ。」

言えば多分、時間は守ってくれるだろう、少なくともコングは。マードックは見張っているしかなさそうだが。

「それから。」

なおも言葉を継ぐハンニバルを、今度はフェイスマンがうんざりした表情で見下ろした。

「まだ何かあるの？」

このマンション、規則多すぎ。

おもむろに頷いたハンニバルは、厳かに言った。

「ジェイソンに仕事を頼みたいそうだ。」

フェイスマンは、今度は鳩が豆鉄砲を食らったような表情になった。

「仕事？ 何の？」

「わからん。しかし、彼女は『いつものアレ、一仕事お願いね』と有無をも言わせぬ調子で言い放っていったぞ。」

「ジェイソンがいけないの？」

「従兄弟なら責任持って代行しろとき。」

「従兄弟って、他人の始まり程度の関係じゃなかったっけ？」

「他人だろうが何だろうが、お前がジェイソンの血縁を名乗っている以上、怪しまれない程度にご近所づき合いはしておくべきだと思うがね。少なくともあと二週間はこの部屋に住む予定なんだし。」

「何やってんだ、二人とも。」

と、その時、唐突に帰ってきたのはコング。

「お帰り、コング。ねえ聞いてよ……。」

「こんなもんがポストにあったぜ。」

フェイスマンの言葉を聞いちゃいないコング、フェイスマンに一通の封筒を渡すと、急いでテレビの前へ。

「ちょっとコング……あ、そう言えば、今日はボクシングの世界戦がある日か。」

『親愛なるテンプルトン。』

手紙は、ごく紳士的な書き出しで始まっていた。

「えーと、『僕、ジェイソン・ヒックスは、NYにいます。本当は今月中に帰れる予定だったんだけど、用事が延び延びになっちゃって、年内は帰れそうにありません。なので、もし迷惑でなかったら、もう少しそこに住んでいてもいいよ。』」

「朗報じゃないか。」

と、ハンニバル。

「そうだね、ちょうど仕事の合間だしね。えーと、何々、『その代わりと言っては何ですが、テンプルトンにちょっとした仕事をお願いしたいんだけど、いいかな？』

……仕事だって、『内容については、添付①を参照にしてね。愛を込めて、ジェイソンより。』」

フェイスマンは、手紙に添えられた紙を開いた。

『お願い。』

添えられていた紙（添付①）には、まず大きな字でそう書いてあった。その後、中くらいの文字で、

『マンションの皆さんの頼みを聞くこと（それが僕の、ここに住まわせてもらっている条件としての仕事です）。』

さらに小さい文字で、

『このマンションに住んでいる以上は、皆さんの頼みを聞かなければなりません。皆さんの頼みを聞いてあげられないのなら、たとえテンプルトンでも、マンションから出て行って下さい。僕は、僕の友達が人非人でないと信じています。さらに僕は、僕の友達が、僕の期待に沿うような活躍をすると信じています。』

音読を終えたフェイスマンは、ははっ、と笑いながら紙を畳んだ。

「期待されちゃってるよ。どうする、ハンニバル？」

「どうするも何も、具体的な話が何もないじゃないか。」

「頼みを聞くってあったってよ、どうせ電球を替えてくれる、芝生を刈ってくれたの、雨樋が詰まったから掃除してほしいだの、そんな程度の話だろ。やってやりやいだろが。」

テレビがコマーシャルを流し始めたので、コングも話に入ってきた。

「まあ、そのぐらいの仕事なら、ちゃちゃつとやってやっても構わんが。」

色好い反応の後、ハンニバルは言葉を続けた。

「それよりコング、ヤカンを弁償して、マイクロウエーブオーブンを直しといてくれ。」

「ほらよ。」

コングが紙袋を差し出した。

「言われる前に買っといたぜ。文句ねえだろ？」

紙袋の中から、箱に入ったヤカンを取り出し、ハンニ

バルはヤカン本体をフェイスマンに差し出した。

「とういわけで、フェイス、インスタントでいいんで、

コーヒーを頼む。それからコングは、オーブンの修理だ。」

「試合が終わったら、すぐやるぜ。」

「俺も、シート干し終わったらすぐに。」

「うむっ。」

ハンニバルは満足げに頷いた。

と、その時。

ドタドタドタ、ピンポーン。

廊下で誰かが慌てている。

「ハンニバル、出てくんない?」

シートと取っ組み合いをしているフェイスマンが、シ

ートの向こうにいるであろうハンニバルにやんわりと

頼んだ。

「はいはい、出てしんぜよう。」

ソファから腰を上げたハンニバルが玄関のドアを開

けると、廊下には、しゃくり上げてマードックが。

手には一冊の絵本。

「大佐あ……えぐつ、すん、えぐつ、これ。」

と、マードックは絵本をハンニバルに突きつけた。

「すっごくいい話だから、読んでみて。」

ハンニバルはそれを手に取り、表紙を見た。

「こんなもん、どうしたんだ?」

「病院のレク室にあった。も、俺、感動しちゃって。」

感動のあまり、病院を抜け出してきてしまったらしい。

クレヨンで描かれた拙く見える絵は、冷静に見れば、

子供が描いたものではなく、大人が巧妙に子供の絵を真

似て描いたものだとわかる。タイトルは『どうして?』。著者名はJヒックス。ついさっき聞いたような……。

「おいフェイス、そのジェイソンとやらの本職は何だ?」

リビングに向かって尋ねる。

「本人曰く、グラフィック・デザイナー。絵描いたり、

本書いたりしてる。俺は見かけたことないけどね。」

リビングの、シートの中から返事が返ってきた。

「奴さんの著書、ここにあるぞ。」

「え、何でよ? でもどうせ、馬鹿みたいな本でしょ。」

「その馬鹿みたいな本を読んで泣いてる奴もいるんだが。」

「じゃあ、きつとそいつも馬鹿なのか、じゃなかったら、

ジェイソンレベルの変わり者なんじゃん?」

「……フェイス、お前さん、今の、一応、上官侮辱だぞ。」

いいように言われているマードックは、幸い、自分の

ことを言われているとは思っておりませんでした。そして、

いいように言っているフェイスマンもまた、幸い、

自分がどこの変わり者を批評したのか気づいておりま

せんでした。一瞬後には気づいてなかったことにしようと

心に決めたけれども。

さて、フェイスマンがシートとの格闘を終え、コング

の見ていたボクシングの試合が終わり、マードックが感

動のたけをハンニバルに一通り語り終えて気が済んだ

後。

コングの買ってきたヤカンでフェイスマンがインス

タントコーヒーを淹れ、一同は寄り集まって一息ついて

いた。

「へえ、これがジェイソンの本ねえ。」

マードックの持ってきた絵本をフェイスマンがバラ

バラと捲りながら言う。

「これ、売れてるのかな?」

「少なくとも病院のレク室に入るくらいにな。」

コングの台詞に、ハンニバルがにやにやししながら口を

挟む。

「まあ、寄付って可能性もあるがね。」

「にしてもよ、まさかこの本の作者と知り合いだったなんて、さつすがフェイス、顔が広いね。」

目をキラキラさせながらマードックがフェイスマン

を見上げた時。

ピンポピンポピンポピンポ、とドアチャイムが鳴った。

「さっきの婦人かな。」

フェイスマンは大儀そうに腰を上げ、玄関へと向かっ

た。フェイスマンを除く三名は、既に飲み物片手のまっ

たりモードに入っており、動くのが億劫なのだ。

ピンポピンポピンポ。

「はいはいはいはい。……はい。」

ドアを開けたフェイスマンの前に立っていたのは、先

程のご婦人、ではなく一人の老人。

「ジェイソンはいるかね?」

「仕事でNY行ってます。」

「ふうん。あんたは?」

「従兄弟です。」

「じゃ、あんたでもいい。例のアレ、早くしてくれ。」

「例のアレ?」

「ジェイソンに頼んであるいつものアレじゃよ。急いで頼むぞ!」

老人はそう言い放つと、「ちよつと」と言うフェイス

マンの言葉を完全に無視して去っていった。

「どうした、フェイス。またご近所さんか?」

居間でまったく寛きながらハンニバルが問いかける。

いつの間にか居間のローテーブルの上にはクッキーや

らドライフルーツやらが並んでいる。その景色に、フェ

イスマンは少しムツとした。

「うん、そうみたい。例のアレ頼むって。」

「またか。アレとかソレとかばかりだな、ジェイソンの

仕事は。」

ズズ……とコーヒーを啜る御大。

フェイスマンは、そんなハンニバルに抗議を示すべく、

大袈裟に溜息をつきながら玄関ドアを閉めようとした。

しかし、なぜかドアが閉まらない。フェイスマンは、「あ

れ? あれ?」と言いながらグイグイとドアノブを引い

た。その度、ドアは反対側に引っ張られてギシギシと音

を立てた。

数十秒間その引つ張り合いを続けた後、フェイスマンは唐突に手を離れた。

「わあ！」

ドアが勢いよく開いたと同時に、何かが反対側の壁にぶつかって転がった。

「痛いじゃないか！ ママに言いつけるぞ！」

転がった物体―一人の少年は、そう怒鳴り、間髪を入れず、ふええん、と泣き出した。

子供の泣き声で腰を上げてやって来たのは、そう、当然、コング。廊下で泣き叫ぶ少年をただ見下ろしているだけのフェイスマンを脇に退かせ、子供の目の高さに見やがみ込む。

「どうした、坊主。どっか痛くしたか？」

「うええええん！ 鼻と頭〜！ びええええん！」

盛大に泣きながらも、痛い箇所だけは伝える。親の賜物の賜物だろうか。

「鼻と頭か。どら？」

と、コングは少年を抱き上げ、頭を摩った。

「どこにもタンコブできてねえから大丈夫だ。鼻血も出てねえ。」

なおも頭をさすさすと擦る。そうしていると、次第に少年は落ち着いてきた。コングの肩に顔を伏せ、えぐえぐすすんしているものの。

コングは少年を抱いたまま、リビングに入ってきた。

「フェイス、ティッシュくれ。それと、こいつにココアな。」

「はいはい。」

ティッシュボックスを投げて寄越してから、フェイスマンは素直にキッチンに向かった。

「で、坊主、俺たちに何か用か？」

鼻をかんで、涙でべちよべちよになった顔を拭いてから、少年は鼻声で言った。

「おじさんたちに用があるんじゃないなくて、僕はジェイソンに用があるんだ。ジェイソンはどこ？ ここ、ジェイソンぢだよな？」

「ああ、間違いなくジェイソンの家ではあるが、奴は今NYにいて、帰ってくるのは年が明けてからだ。」

おじさんその一（ハンニバル）が疲れたように説明す

る。

「来年になってから？ どうしよう、ママに怒られちゃう。急いでジェイソンに『いつものアレをお願いね』って伝えなきゃいけなかったのに。」

また「アレ」である。

「よう、坊主。そのアレってのは何でい？ ジェイソンの代わりに俺たちがやるってことはできねえのか？」

核心を突くコング。そう、「アレ」が何かわからなければ、不可能を可能にするAチームでも「アレ」をこなすことができないのだ。…不可能を可能にしないじゃん。

「おじさんたちがジェイソンの代わりに？ うーん、できなくもないと思うけど。僕んちのやつなら。」

「じゃ、俺たちがやってやるぜ！」

少年をソファの上を下ろして、コングが胸をドンと叩いた。

「で、俺たち、何すりゃいいわけ？」

ソファの上で膝を抱えて丸まっていたマードックが尋ねる。

「僕んちのは簡単だよ。いつもジェイソンは『おやすいご用ですよ』って言ってたし。うんとね、モミの木を買ってきて、家の中に運んで、僕と一緒に飾りつけるの。あとね、ママと一緒に買い物に行つて、荷物を運ぶの。」

それって父親の仕事じゃ、と思う者数名。しかし、それを口に出してはいけないような気がして。

「その仕事、俺やるよ。」

ココア入りマグカップを手にフェイスマンが戻ってきた。

「はい、ボク、ココア。熱いから気をつけてね。」

「ありがとう、おじさん。」

「あ、あの、せめて『お兄さん』と……。」

お兄さん、と呼ばれたがために優しくしたのに。ココアにマシマロまで入れたのに。

「いいか、坊や。俺はハンニバル、これはコング、こっちのはモンキー、で、あそこで打ちひしがれてるのがフェイスだ。覚えとけ。」

おじさん×四人では何かと不便なため、リーダーとし

てハンニバルがメンバーを紹介する。

「うん、わかった。ハンニバルおじさんとコングおじさんとモンキーおじさんとフェイスね。僕はオリバー。オリバー・キンケイド。」

「よし、オリバー。君んこの仕事はフェイスがやるそうなんだが、それでいいか？」

「いいよ。でもフェイス、ママを怒らせないようにね。あとでママのグチを聞くのは僕なんだから。」

「はいはい、粗相のないよう精一杯やらせてもらいます。」

偉そうなオリバーに、フェイスマンが恭しく頭を下げる。

「他んこのアレってのはどうすんのさ？ いちいち聞いて回る？ お宅のアレって具体的に何ですか、つて。」

今回、今一つ出番の少ないマードックが、建設的な疑問を述べた。

「……閲覧板を使うってどうかな？ ジェイソンの代わりに仕事を引き受けますんで、画面にて具体的に用件をお知らせ下さい、って回すんだ。」

閲覧板、それはフェイスマンに妙に似合う物。

「それなら、我々が各戸を回る手間が省けるな。それで行こう。」

提案が通り、ベトナムで鳴らしたツワモノどもは、再びクッキーやらドライフルーツやらを囲んでまったり始めた。ただし、フェイスマンは閲覧板作成。

三十分経過。

「できた！」

キッチンのテーブルで作業をしていたフェイスマンが満足げな声を上げた。

「どれ、見せてみる。」

よっこいしょ、とリビングのソファから腰を上げ、フェイスマン作の閲覧板を検分しに行くハンニバル。

「……ま、いいでしょ。いろいろ言いたいことはあるがね。どうせこのマンションだけの閲覧板だし。」

「気になるな、その言い方。ま、どうせこのマンションだけだしね。」

そう言いつつ、フェイスマンはまだリビングに居座ってコングと遊んでいたオリバー少年を手招きした。

「それじゃ行こうか、オリバー。」

「えーっ。もつとコングおじさんと遊びたいよお。」

不満そうなオリバーの頭を、わしわしとコングが撫でる。

「また明日な。ママに用事を頼まれてたんだろ。」

「あ、そうだった。フェイスをうちに連れてかなきゃ、ママに怒られちゃう。この頃、気が短いからね。」

「ハハ、それはママには言わない方がいいぞ、オリバー。」

フェイスマンはさりげなく詐欺師的心得をいたいな少年に教え込みつつ、仲間たちの方を振り返った。

「それじゃ、俺は回覧板を回すついでに、この子の家に行つて頼まれた仕事を片づけてくるから。回覧板を見た他の住人が何か言ってきたら、頼むよ。」

「任じといて。」

いやにやる気満々にマードックが答えた。

やる気満々なマードックにバイバイ、と可愛らしく手を振って、オリバーとフェイスマンは部屋を出た。因みに、どちらがより可愛らしかったかは、見た者の判断による。

オリバーの部屋は一階。ジェイソンの部屋は二階。と言つても、このマンションは二階建ての横にだっ広いコンドミニウム・タイプなので、階段を下りてから結構歩く。

フェイスマンはオリバーの手を引き、遊歩道を通ってオリバーの部屋へと向かった。遊歩道の右手に海が見える。このマンション、立地は高台、かつ全室オーシャン・ビュー。サンタフェ・スタイルの相当にオシャレなセレブ向けマンションなのだが、いかんせん築三十年。目に見えない管だの線だのには結構ガタが来てるし、壁も薄いので騒音が響く。

「ここのだよ。」

オリバーは突然そう言うと、駆け出した。子供とは常にいきなり走り出す生き物であるが、そんな生き物に慣れていないフェイスマン、手を引かれてつんのめりながら後を追う。

「マミー、アイムホーム！」

ドアを開けてオリバーが叫んだ。

「まあ、オリバー、どこ行つてたの……って、あら。」

奥から現れた女性は、先程フェイスマンに洗濯ルールを教えてくれたご婦人ではないですか。

「やあ、こんにちは。」

「ジェイソンちの人ね。」

「従兄弟です。」

「そうそう、従兄弟。じゃあ、ジェイソンの代わりをやつてくれる気になったのかしら？」

「ええ、ジェイソンの代わりに、ツリーの飾りつけとか、買い物でしょ？ おやすいご用ですとも。」

フェイスマンは、きつちりと安請負をした。

オリバーと彼の母親、そしてお手伝いのフェイスマンは、それから約一時間後、高さ七フィートのモミの木の前で険悪なムードになっていた。モミの木が七フィートもあるからではなく、フェイスマンがロープを持ってこなかったからである。

「モミの木を車で買いに行くのに、ロープを持ってこなくて、あなた、どういう了見？」

「ロ、ロープなんて、ええと、まあ普通、車のトランクに入っているもんなんじゃないかと思ひまして……。」

確かにコングのバンには、いつもロープが積んであるけれど、それは民間人には通用しないんじゃないかと。

「私はね、あなたがロープを積み込んだものと、すっかり信じていたのよ。だって、そうでしょ、オリバー。ジェイソンはいつもそうしてくれたわよね？」

「うん、『モミの木を買いに行くのなら、ロープを忘れちゃダメだ』って言つてた。『万一ロープが切れた時のために』って二、三本用意してくれたよね。」

「ホントにあなた、気が利かないわね。少しはジェイソンを見習つたらどう？」

気が利くわね、と女性に言われたことは数々あれど、気が利かないわね、とは未だかつて言われたことのなかつたフェイスマンは、「おやすいご用」の初っ端でいぶ挫けていた。

「わかりました、ロープを買つてきましょう。」

「もちろんよ。他にどうやって七フィートのモミの木を持って帰れるって言うの？ でも、ロープを忘れたのはあなたの責任だから、ロープ代は出さないわよ。」

モミの木を買う時に値切りに値切つたのはフェイスマンであり、その浮いた金でロープぐらい買えそうなんだが、そう考える隙を与えないよう、早口でピシッと言い放つ。

そして十五分後、無料でたつぷりのロープを手に入れたフェイスマンが、車とモミの木とオリバーたちのところに戻ってきた。

「遅かつたわね。」

「ロープ売ってる店がなかなか見つからなかつたもんで。」

「言い訳は結構。さつさとモミの木をルーフに縛りつけて。」

女王様然として命令するオリバーの母親。ハンニバルだつてもう少し穏やかに命令してくれるつてのに。

何とかモミの木を車に縛りつけたフェイスマンだったが、帰りの車の中でもケチヨンケチヨンのクソミソに言われ続けていた。その原因は、モミの木を縛りつけているロープのせいで窓が閉まらなくて寒いつてこと。これは決してフェイスマンのせいじゃないと思うんだが、ジェイソンがやったとしてもこうなると思うんだが、オリバーの母親は全ての苛立ちをフェイスマンの責任にしたいらしい。

窓の外を見つめながら、フェイスマンは早く解放されるよう祈るしかなかった。

フェイスマンの祈りが通じたのだろうか。交差点で止まった途端、歩道から駆けてきた女性が、ゴンゴンと半開きの窓ガラスを叩いたのだ。因みに、ゴンゴンではなくて、本当にゴンゴン。スレンダーなボディに似合わず、破壊力のありそうな女だった。

「ハイ、マリアン。ちようどいいところで会つたわ！」

「あら、キムじゃない。あなたも買い物？ 帰るなら乗つていきなさいよ。」

助手席にいたオリバーの母親が、それまでフェイスマ

ンに向けていた般若のような顔を一変させて、にこやかに後部ドアを開ける。

「助かるわー。」

さっさと乗り込んで来たキムに、オリバーが挨拶する。

「こんにちは、キムおばさん。」

「お姉さんと呼び！」

キムはびしりとオリバーの胸に突っ込みを入れた。関西人も真つ青の早業である。

「ちよっと、青になったわよ。何ボヤボヤしてるの。」

どうやらマリアンという名前らしいオリバーの母親が、フェイスマンを叱責した。慌ててアクセルを踏みながら、フェイスマンは恐る恐る尋ねる。

「あー、そのお友達の方は、どこまで送ればいいんでしょうか？」

「ああ、真つ直ぐ帰ればいいのよ。キムはうちの隣の部屋に住んでるんだから。」

どうやら、この女性も同じマンションの住人であるらしい。

そして、キムはフェイスマンを見るなり、目を輝かせてマリアンの横まで身を乗り出した。

「ねえ、もしかして、彼、ジェイソンの代理？」

「そうよ、ジェイソンほど気は利かないみたいだけど。マリアンのお手上げジャスチャーが全く目に入っていないかの様子で、キムはよっしゃーのポーズを取った。

「よかったー！ ジェイソンに頼みたいことがあったのよ。急ぎで。」

盛り上がるキムの傍らで、フェイスマンはひしひしと迫り来る嫌な予感にガラスの心臓を震わせるしかなかった。

さてフェイスマンがオリバーン家にかかりきりになっている間、残りの三人はどうしていたかと申しますと、これが案外まったり。

閲覧板を回したついでに、玄関ドアに「ジェイソンへの依頼は、今、回している閲覧板にご記入下さい」って書いて貼ったもんだから、ジェイソン目当てでやって来た住民は、ドアの前でUターンせざるを得ない状態なわけ。

居間のテーブルからは、コーヒーやホットミルクの温かい湯気が立ち上り、それを囲む三名は、それぞれの目下の関心事（コングⅡ孤児院へのクリスマス・プレゼントのリストアップ、マードックⅡスケッチブックとクレヨンで怪しげな絵本の作成、ハンニバルⅡフェイスマンが集めてきた健康食品のカタログを眺め回して悪態をつく）に没頭していたのであった。

しかし、幸せな時間がいつまでも続くはずがないのはお尋ね者のサガ。暖かい陽だまりの午後(?)は、即行戻って来た閲覧板によって無残にも終止符を打たれたのであった。

「閲覧板、返ってきたみたいだぜ。とつとと終わらしちまおう。」

ドサリという物音に気づいたコングが席を立つ。

「何だこりゃ？」

玄関を開けたコングが叫んだ。

「どうしたコング。閲覧板じゃなかったのか。」

「……：閲覧板だったぜ。それも、極厚の……。」

見れば、コングが手にしている閲覧板、元はクリップボードに紙一枚を挟んだものだったが、現在はその紙の下にいくつもの書類が挟まれている。既にクリップボードのクリップは機能しておらず、極太ゴムバンドで書類がボードに結束されている状態。そして、それぞれの書類は、それぞれに厚みがあり、決して紙一枚なんかじゃない。ご丁寧に各件ごとにステープラー留めして下さっている。案外このマンションの住人たち、神経質そうだな。いや、「案外」ではなく「案の定」と言うべきか……。

「一、二、三、四……（中略）二十九冊もあるぜ！」

ゴムバンドを外して、書類の束を数えるコング。

「何が？」

事態を未だ把握できていないハンニバルが尋ねる。ハンニバルともあろうお方がなぜ、とお思いであろうが、そう尋ねる御大の視線は健康食品のカタログの「無臭ニンニクタブレット（お徳用）」に釘づけになっていて、それどころではないのだ。

「ジェイソンへの依頼が、だ。書類で二十九冊。」

「オリバーんこの入れたら、全部で三十件だね。オイ

ラたち四人だから、一人平均……。」

と、マードックはスケッチブックに黄色のクレヨンで割り算の筆算をした。

「一人平均八件、余りマイナス二！」

合ってるけど、違う。まあ、「一人当たり八件受け持って、四人のうち二人は一件ずつ少ない」と、「一人当たり七件受け持って、四人のうち二人は一件ずつ多い」とでは、結果は同じでも、前者の方が二人は楽できるような気がする。

褒めて褒めて、という顔をしているマードックを無視して、コングは閲覧板（元の紙つべら一枚）に目を落とした。フェイスマンが書いた枠は十五行。二階建てマンションで、ワンフロアに八室、全部で十六軒。そこからジェイソン宅を引いて、十五軒。それは合ってる。ちゃんと、十五家庭の「見ました」のサインも書いてある。なのに、依頼は二十九件、いや、三十件。一戸当たり二件の依頼、ということだろうか。

「ハンニバル、カタログ見てねえで、早く取りかろうぜ。じゃねえと、年内に終わりそうもねえ。」

「うむ、そうだな。」

そうして、まったくしていた三人は依頼書に手を伸ばした。

ハンニバルが手に取ったのは、青いB5封筒だった。表には「一号室 ヤンソン」の名前。中から出てきた便箋の一枚目にはこう書かれていた。

『我が家の子供たちにクリスマス・プレゼントを買って下さい。予算は合計で二百ドル。子供たちからサンタさんに宛てた手紙を同封します。例年のように、プレゼントには一人分ずつ、サンタクロスからの手紙をつけて下さい。P.S. 決して子供たちには見つかからないよう気をつけること。』

ハンニバルが読み上げた手紙の内容を聞いて、マードックが口笛を吹いた。

「子供のクリスマス・プレゼントに二百ドルたあ、豪勢じゃーん。」

「いや、それでもなさそうだな。」

ハンニバルがびらびらと振って見せたのは、子供たち

からサンタさんに宛てた手紙……の束。

「一体一人が何枚書いたんぞ。」

「コングの言葉にハンニバルがばらばらと紙束を捲り、ふっと乾いた笑いを漏らした。」

「一人一枚だ。九人分で九枚。」

「……子沢山な家なんだな。」

「で、プレゼントのリクエストって何なの？」

興味津々のマードックの質問に、ハンニバルが咳払いを一つして、読み上げる。

「何々……自転車、ゲームソフト、DX野球盤、血統書つき子犬、掃除機？ 買えるか、こんなもの！ 予算は一人二十ドルちよつとだぞ！」

「いいじゃねえか、どれも子供らしいリクエストだし、何とか叶えてやろうぜ。」

子供が絡むと目が節穴になるコングが、真顔でそう言った。

「子供らしい？ 掃除機がか？」

「きっと母親の手伝いに使いたいんだらうよ。」

「それにしても、これ全部で二百ドルつてのはキツイな。自転車一台、いくらするんだ、今。」

「子供用でも百ドルは下らないんでないの？」

「高いな。それでも予算の半額だ。ゲーム機つてのは、ニンテンドーのことか。」

「多分ね。中古で買つても百ドル。」

「二品で金が尽きたぜ。どうするんだ、ハンニバル。」

「そうさのう……。」

と、腕組するハンニバル。

「(満面の笑みで) 買えないなら、作ればいいんでないの？」

「Aチームのテーマ、かかる。」

廃材置き場でタイヤや鉄パイプを集めるマードック。

中古ゲーム屋で値切り倒すマードック。

ベニヤ板に色を塗って釘を打つハンニバル。

「ワンニャン愛の家」にて、「動物虐待について」のビデオを見せられ、涙目で鼻をかむコング。

タイヤライターに向かうハンニバル。

壊れた扇風機の羽根とジュエリーの胴体とビニール

ホースとモーターとゴミ袋とヘアブラシとキャタピラで何やらウインウイン言つてブルブル震えるマシンを組み上げるマードック。

「Aチームのテーマ、終わる。」

「できたぞ！」

額の汗を拭つてハンニバルが言った。

「ああ、依頼通りの物が揃つたな。」

「しかも、かかったお金は全部で五十ドル。」

「実にいい仕事をしたな。皆の者、ご苦労さん。」

ハンニバルの労いに、満足げに頷くマードックとコング。

しかし、彼らの目の前に積み上がっている物品ときたら。乗用車のタイヤを鉄パイプで繋ぎ、サドル代わりにバー用のツールを乗せた「自転車」。値切り倒して買った「ドンキーコング(中国語版)」。なぜかアクアドラゴンがバットを構える図柄の手作り「野球盤」。どっから見ても何かの純血ではあり得ないサイズと柄と毛並みと耳と態度の「犬」(子犬ですらない) ニフ偽「血統書」。「これ何だかわかる？」と通りすがりの十人に聞けば、八人が「倒れたジュエリーサミキサー」と答え、残りの二名が「ゴミ」と答えるであろう物体一つ……。危うし、ヤンソン家(のクリスマス)！

ヤンソン家がどうなるか、クリスマスになってみなければわからないのだが、ともかくまったり三人組は一仕事終えた充実感を胸に、現在、依頼書を鋭意分類中。

「こりゃ掃除の手伝いだからして、フェイスにびつたりだな。」

「『この冬流行のジュエリーを半額以下で手に入れる』だあ？ フェイス以外の誰がそんなことできるつてんだ。」

「排水管が詰まりかけているので直して下さい。……コングちゃん用の依頼だね、これは。」

という感じに、フェイスマン担当とコング担当ばかりが増えていくのであった。ある意味、的確な判断と言えよう。

「おい、ちよつとこれ見てみろ。」

ハンニバルが一通の依頼書を手にした。覗き込む二名。

依頼書曰く、「この間、いきなりトースターが壊れちゃって、それからずっと不便してるのよね。だから、まずはトースターの修理。直らないようなら、十ドルぐらいのを探して買ってきて。お次は、うちの前と後ろの庭の手入れ。去年から何もしてないんで、あれこれ伸びっ放しで大変。来年のクリスマスまで庭師を呼ばなくて済むぐらいにしてちょうだい。ああ、それから、これが一番大事。車の修理。今朝エンジンがかからなくて、それつきりなのよ。どうにか動くようにして。この三つが終われば、あとは簡単。空き缶を洗って潰して、ゴミに出す。窓を拭く。キッチン換気扇の掃除。(もつと増えるかもしれないけどね。) 以上よろしく。wキム。」

「このキムとか言う女、我々の知ってる誰か(エンジン)と相性よさそうじゃないか？」

「ああ、そうかもしれないね。……奴も呼び出そうつてののか？」

「来てくれるわきゃないつしよ。喜びそうなもん、何もなし。」

「いや、しかし我々は現在、猫の手も借りた状態だ。」
「と言いながらも、ソファでふんぞり返つていらつしやいますか。」

「なあ、フェイス？」

フェイスマンにエンジェルを呼び出してもらおうと、あらぬ方向に顔を向けるハンニバル。

「いねえよ。オリバーんとか行つたつかりだぜ。」

「モミの木買いに行つて、買い物につき合つて、を三回ぐらいい繰り返してんじやん？」

確かに、モミの木を買いに行き、オリバーの母親(マリアン)の買い物につき合うだけなら、こんな遅くなるはずがない。

フェイスマンの身に何かあったんじや……？

三人の頭にふと過つた嫌な考え。しかし三人は瞬時にそれを払拭した。嫌な考え、休むに似たり。そして三人ともが、無言のまま同じ意見に達した。「オリバーの母親、かなりの美人に違いない。」(ここまでお読みの皆さんなら、それがあまりにも見当違いだということにお気

づきであろう。」

さて、その頃のフェイスマンはと言えは。

「マリアン（いつの間にか呼び捨て）、飾りつけ、こんなもんでいい？」

「うーん、今一つかしら。ツリーの天辺に金モールをもう少し増やしてちょうだい。」

「ええ？ さっき俺がそこに金モール巻いたら、それじや多すぎて下品だから外せって言ったじゃん。」

「気が変わったの。さっきはさっき、今は今。」

「そんなあ。」

と言いながらも、言われた通りにモールを巻くフェイスマン（根がフェミニスト）。買って来たばかりのツリーを前に小一時間こんなやり取りを繰り返している二人である。因みに、オリバーはお疲れのため昼寝中。

「ちよっとマリアン、いつになったら終わるのよ！ 私の用事だってあるんだからね。」

と、フェイスマンの身柄を確保すべく、マリアン&オリバー宅に上がり込んで、勝手に紅茶だのクッキーだのを召し上がっていたキム。

「うーん、じゃあこんなもんでいいわ。あとはオリバーと考えるから。」

テーブル上の菓子類の消耗度合を見たマリアンが、溜息をついてそう言った。

「じゃ、これで終了？」

「そう。あとはキムの方、お願いね。」

「オッケー、じゃ、また。オリバーよろしくね。さ、行こうか、キム。」

そう言って立ち上がると、フェイスマンはキム（結構美人）の肩を抱き、オリバー宅を後にした。

「さ、今度は君の番だよキム。何をすればいいの？」

さっき来た道をキム宅方面に戻りつつのフェイスマンの問いかけに、キムは笑顔でこう答えた。

「簡単よ。ちよっとダンスの相手をしてくれればいいだけだから。」

「ダンス？」

フェイスマンの顔が綻ぶ。しめしめ、美女とダンスとは、今度の依頼は楽しめそうだなぞ……。

「そう、エアロビック・ダンス。」

「え、エアロビック？ エアロビックって、あれ？ あの、レオタード着てワン・ツー・ワン・ツーって足上げたり跳んだりするやつ？」

「そう。その競技バージョン。明日、ジェイソンと組んで市の競技会に出場することになったのよ。」

「え、ちよっと待ってよ、俺、エアロビクスなんてやったことないよ。」

「大丈夫、あなたは見栄えがいいから。振りつけは、一晚みっちりやれば、完璧に覚えられるわ。」

「そうかな？」

「そうよ。何しろ競技ダンスで一番重要なのは見栄えですもの！」

「そっか。」

フェイスマンとキムは顔を見合わせて笑った。フェイスマンもおだてりや競技会。詐欺師を手玉に取るキムの手並みもなかなかのものである。

「それじゃ早速、練習にかかりましょ。」

マリアン宅の菓子をしこたま食べたキムは腹拵えもバッチリだった。一方、フェイスマンはと言えば、オリバーの呼び出しに始まって、マリアンに買い物に連れ回され、ツリーを運び、一歩進んで二歩下がる飾りつけを繰り返して、正直疲れてきていた。小腹も空いてきた。

しかし、ダンスの練習なんてそうそう何時間も続けられるわけもなし、少しやれば「休憩よ」なんて、キムの手料理にありつけるかもしれない。

「わかった、頑張るよ。」

夢見がちなフェイスマンはキムの「みっちり」が本当に言葉通り「みっちり」であることに、この時はまだ気づいていなかった。

再び、ジェイソンの部屋に戻って。

ハンニバル以下三名はこの日三度目のコーヒープレイクに突入しつつ、依頼書の検分を続けていた。

「粗方、目は通したな。」

「ああ、これで最後だ。」

コングが手にしていた依頼書を分類された右端の山

に置きながら言う。

テーブルの上には三つの山ができていた。即ち、フェイスマン担当の山、コング担当の山、そして最後が、誰でもできそうな山。別名、ハンニバルとマードックで分担する山。

「で、どれから手をつけるの？」

マードックのお伺いに、ハンニバルは重々しく頷いた。

「どれでも構わん。ただし、これは一番後だ！」

びし、と指し示したのはキムの依頼書。

「じゃ、それ以外から適当に選ぼうぜ。」

キム宅のリビングは、リビングルームと言うよりむしろダンス・レッスン場だった。壁一面に張られた大きな鏡、床は凹凸のない板張り。そこにカセットデッキが一台。テレビでよく聞くアップテンポの曲が流れている。

そして、流れているのは曲だけでなかった。フェイスマンの顔面から背面からガラガラと流れ落ちる汗。クリスマス間近ではあるけれども、閉めきった部屋で二時間近く跳んだり跳ねたりしていれば、体温も上昇、部屋の中也ムンムンの熱気だ。

「はあっ、はあっ、ぜいっ、ぜいっ、あ、あ、あっ！」

曲に負けじと大声を張り上げたつもりでフェイスマンだったが、あまりに荒い息と消費され尽くされる寸前の体力のせいで、ほとんど声になっていなかった。

「何してんの、そこで右足振り上げて、ワン・ツー・ターンだって言ったでしよう。」

「いや、はあっ、はあっ、その、違って、はあっ、はあっ。」

キムは怒ったようにカセットデッキの停止ボタンを押した。意思の疎通はなかったにせよ、結果オーライ。床にくず折れるフェイスマンを見下ろして、キムは溜息をついた。

「あなた、体力ないわねえ。」

本当に呆れたように言う。それに対して、フェイスマンはガクガクと頷くしかなかった。そう、ハンニバルもそんなこと言ってたっけ……。

「み、水を……。」

上を見上げる力もなく、フェイスマンが床を見つめた

まま囁くように言う。

「お水？ ちょっと待ってて。」

軽やかな足取りで、キムはキッチンへと消え、すぐにグラスを持って戻ってきた。

「はい、お水。」

ただの水道水をフェイスマンはゴキゴキと飲み干した。

「はふー。」

何とか息も治まり、腹は減っているものの人心地ついたフェイスマンは、しかし床に寝そべった。人心地ついたところで体力が戻るわけもなし。

「大丈夫？」

「ダメ。もう動けない。ちょっと休ませて。」

「じゃあ、十五分くらい休憩にしましょうか。」

と、キムは壁の時計に目をやった。

「あら、もうこんな時間？ お夕飯どうしようかしら？」

「簡単なものでいいから、何か食べさせてよ。君の手料理、食べたいな。」

残りわずかな体力を振り絞って、フェイスマンはそう言ってウイंकを見て見た。この台詞とウイंकとで、十中八九はそれなりのディーナが用意されるものなのだが……。

「でも、今キッチンがひどいのよね。依頼書にも書いたけど、換気扇は煙を全然吸い込んでくれないし、空き缶は山になってるし、トースターは壊れてるし、ガスコンロもガスは出るけど火が点かないし。」

「……ゴメン、俺、まだ依頼書見てない。」

「そう。でも、今言ったからわかったわよね。私からジェイソンへの、いえ、あなたへの依頼は、今言ったのを直したり片づけたりするの、プラス、車の修理と庭の手入れと窓拭き。」

「……それと、エアロビック・ダンスね……。」

「その通り。ダンスのこと、依頼書に書き忘れちゃったんだけど、いいわよね？ とまあ、そういうわけで、お夕飯、作るわけにもいかないし、食べに出る車もないし、近場にはお店もないし、って状況なのよね。」

「じゃあ夕飯、店屋物でいいよ……。」

「ダメよ、そんなの。私、お金の持ち合わせがないんだもの。買い物に出て、財布の中がほとんど空っぽなのに気づいて、トニックウォーター半ダースだけ買って、財布の中が空っぽになったから、バスにも乗れなくて、それでマリ안의車に乗せてもらったのよ。銀行でお金を下ろしてくればよかったって気づいたの、ついさっきだし。……あなたがお金を出してくれるって言うのなら、デリバリー頼んでもいいけど？ 電話は壊れてないから。」

店屋物は高い。それは、いつの時代もどこの国でも同じこと。そんな不経済的なことをフェイスマンが認可するはずがなかった。奢ってもらうならばともかく、自腹で店屋物なんて許せるはずがない。

フェイスマンはむっくりと起き上がった。

「ちょっと電話貸してね。」

プルルル、プルルル。

ジェイソン宅の電話が鳴った。受話器を取ったのは、包丁を砥いでいる最中だったマードック。もちろん、包丁砥ぎも依頼の一つ。

「ハロー。ジェイソン・ヒックス宅、代理人H・M・マードックです。」

『俺。』

「フェイス？ 何、油売ってんだよ？ 早く戻ってきてくれないと、こっちじゃ依頼が山ほど来てて猫の手も河馬の手もペンギンの手も借りたい状況なんだぜ。」

『俺も依頼をこなしてる最中なんだって。今、キムって子の家にいるんだけどさ。』

マードックは、包丁を片手に依頼書を探った。

「ああ、最悪の依頼人、キムね。依頼書来てるぜ。」

『最悪？』

「いや、こっちのこと。で、何？」

『俺さ、お前の作った食事って最高だと思うんだよね。』

『二十五？ そんなご謙遜を。世界一とは言わないまでも、十本の指の中には入るんじゃないか？』

『うん、まあ、そう言ってくれる人も多いね。』

『その料理をさ、キムに食べさせてやりたいわけよ、俺

としちゃ。お前も依頼で忙しいとは思って、ちょっと作ってくれないかなあ？ 腕によりをかけたディーナを。ああ、奇抜である必要は全くないよ。いつもお前が作ってくれてる普通の夕飯でいいから。』

「確かに俺様も今すっげー忙しいけどさ、それはどまで言われて断るようじゃ男が腐るってもんだ。」

『サンキュー。じゃ、二人前、キム宅まで届けてね。よろしく。』

電話が切れた。いい気になったマードックは受話器を置くと、包丁も電話脇に置き、キッチンへと向かった。

「へいお待ちー！」

二十分後。キム宅にマードックが現れた。手には、ジャパニーズ・ラーメン・ショップが生んだ伝説の運搬器具「おかもち」が二つ。

「お腹が空いて死にそう。メニューは何？」

マードックに駆け寄り、おかもちを開けるキム。

「まあ、ブロッコリー。これも、これもブロッコリー？ ねえ、ブロッコリーしかないの？」

「そう。ブロッコリーのフライと、ブロッコリーのグラタンと、ブロッコリーのパスタね。急な話だったから食材が揃わなくてさ。」

「……まあいいわ。ちょうどダイエット中だし。」

「ところでフェイスは？」

「あそこ。」

キムが指差す先には、疲れ果てて倒れ伏すフェイスマン。

「お休み中？」

「知らない。さつき、いきなり『足がっ！』て叫んで倒れたつきり。困っちゃうわよね、まだ振りつけの半分も終わってないのに。ところで、ねえ、あなた、ダンスは得意？」

「ダンス？ 得意って言えば得意だね。例えばほら、こんな風に。」

と、ロボットダンスを披露するマードック。

「ステキ！ あなた、あの人（まだ名前すら聞いていない）より才能あるわ！」

「へっ、俺様のリズム感をフェイスなんかと比べないで

くれよ。こう見えても、病院のチア選手権じゃ、看護婦チームを抑えて優勝だっしてんだかんね。」

「まずまずステキ！ じゃあ、ちよつと踊っていきなさいよ。」

「え？ 今？ えーと、今はちよつと……忙しい……かな。」

「何言ってるの！ いいじゃないちよつとくらい！ あなた、あの人（フェイスマン）の友達か何かでしょう？ あの人が倒れちゃってあたしの練習が進まないんだから、責任取りなさいよ！」

「うーん、そう言われると弱いねえ。じゃ、ちよつとだけ。」

「そう来なくっちゃ！」

かくして、フェイスマンのみならずマードックまでも、エアロピクスの罠に落ちていたのであった。

三十分後。キム宅のリビングに流れていたダンスパブルな音楽がバタリとやんだ。キムがカセットデッキの停止ボタンを押したのだ。

「素晴らしいわ、あなた（マードックの名前も聞いていない）！」

キムはマードックの両手を掴んで、くるくると回った。「そのリズム感に斬新なダンスセンス、パッション、何より体力！」

「ああ、よく言われるよ。」

息を切らしながらも、まだ余力を残すマードックが、満足げに頷いた。

「決めたわ。明日一緒に競技会に出てちょうだい。チア選手権に出たくらいなもの、イけるわよね？」

質問の形式を取りつつ、それはもう決定事項。宣言するキムに、マードックがボソボソと言ってみる。

「そりゃ構わねえけどよ、オイラもこう見えて忙しいって言うか、ほら、いろいろやることあんだよね。」

「そ、それは俺がやるよ！」

フェイスマンが慌てて手を挙げた。彼はキムとマードックが踊り続けている間、ずっと床にへたばっていたのだ。

「モンキーがキムのパートナーになれば、俺はお役御免

だろ。」

「それはダメ。」

フェイスマンが見た一筋の希望の光明は、キムにあっさりとは却下された。

「確かにこの人（マードックを指差して）のダンスは素晴らしいわ。でも、（指をフェイスマンの方に動かして）あなたの方が、華がある！」

どうすりゃいいんだよ、俺たち、って顔でキムを見る二名の特攻野郎。

と、その時。

ピンポーン。

常識的なドアチャイムが。

「はーい。」

依然として軽やかな足取りでインターホンに向かうキム。

『トースターと車、直しに来たぜ。』

「ジェイソンの代理人その三ね。今ドア開けるわ。」

案の定、姿を現したのはコングだった。

「ためえら、そんなイカれたカッコして、何サボってやる！」

フロアに倒れたままのフェイスマンと、腰に手を当てて気取ったポーズのマードックとを見て、コングがそう吠えるのも無理はない。二人ともレオタード姿（男性仕様）なのだから。

「サボってんじゃないよ、依頼をこなしてるんだって。」

「オイラは、飯運んできて捕まっただけ。そう言やコングちゃん、飯（プロッコリーと豆腐のバーガー）チリコンカンソース＋フライドポテト）用意しといたのわかった？」

「おう、食った食った。美味かったぜ。それはそうと、ためえ、砥ぎかけの包丁、放り出しっ放しだったろ。」

「あー、そーだった。じゃ、オイラ戻って包丁砥ぐわ。銀の食器も磨かなきゃならねっし。」

キムの前を何気なく通りすぎようとするマードック。

「待って、あなた（まだ名前前からず）。」

マードックの行く手をキムが阻んだ。

「私の依頼はどうなるの？」

「オイラにや華がねえんだろ？ じゃ体力あったって

ダンスの才能に溢れてたって、卓越したセンスの持ち主だって、意味ねえじゃん。それに、体力で言ったらコングちゃんの方が俺よか上だしね。」

「そらま、そうだな。」

既にキッチンからトースターを持ってきて、リビングのフロアに座り込んで修理を始めているコングが、わけもわからずに返答した。

「……そうね、あなた（名前、さっき耳にしたけど覚えてない）、体力だけはありそう……。」

キムの値踏みする目がキラリンと光る。

「体力だけじゃなくて、他にもいろいろとあるけどな。」まだ何も気づいていないコング。ハイペースでトースターを直して、さらに庫内の掃除すらしている。

「じゃ、オイラ、失礼しまーす。」

キムの隙を突いて、おかもち二つを手につけていくマードック。要領のよさでは、恐らく四人の中で一番なのではなからうか。

だがしかし、彼はレオタード姿のままだ。どうする、マードック！ 着てきた服はキム宅ゲストルームに置きっ放しだぞ！

「ああ、コング、あと換気扇とガスコンロも直してって依頼なんだけど。」

「おう、わかった。車は後回しだな。空き缶と窓拭きは、フェイイス、お前に任せたぜ。庭の手入れは、明日、四人がかりでやろうって話だ。」

事態がわかっていないコングは、着実に依頼をこなそうと必死。

「ほら、トースター直ったぜ。サーモスタットがひん曲がってやがった。」

「まあ、早かったわね。どうもありがとう。で、あなた（コング）、ダンスはお好き？」

「いんや、好きじゃねえ。」

「何ですって！」

ダンス好きの人は、世界人口の九十九パーセント以上の人間がダンスが好きだ、と信じている。そして、ダンス嫌いの人は、すべての人間がダンスが好きだというわけではないし、すべての人間がダンスが嫌いだというわけでもない、とわかっている。これは、ダンス以外のこ

とについても言える。

「俺ア、体を動かすのは好きだが、ダンスだけはどうも苦手だな。」

この瞬間、キムは「逃がした魚は大きい」と悟った。

「……わかったわ。あなた（コング）は引き続き修理をお願い。で、あなた（フェイスマン）。あなたは包丁を砥いで、うちの空き缶を潰して捨てに行つて、その窓を拭きなさい。そして、何よりも最初に、さっきの彼（マードック）を連れてきなさい！」

完璧に命令されちゃっているAチームの面々であった。

「でも、華がないんじゃない？」

「華なんか、なかったら作ればいいのよ！」

強引さでは、誰にも負けないキム。明日にはAチームのリーダーを名乗っているかもしれない。

そこで、フェイスマンはすぐごとキム宅を後にし、ジェイソンの部屋に戻つていった。マードックを呼び戻すために、だ。

例え、その格好がレオタードのままであつたとしても、またすぐに戻つて空き缶を潰して捨てたり、窓を拭かなくてはならないにしても、一瞬でもキムの部屋から脱出できたのは嬉しい。何と言うか、楽に呼吸ができる感じだ。

だが、階段を上がつていくにつれ、フェイスマンの足取りは重くなつていった。マードックを連れ戻すには、まずマードックを言いくるめ、さらにハンニバルの追及をさらりと躲す必要があるのだ。いかにフェイスマンが天才的な詐欺師とは言え、相当難しい仕事だ。何しろ、ハンニバルはフェイスマンの手口を熟知しており、そしてマードックもまた、キムに近づいては危ないと察知しているからだ。

「ただいま。」

仮住まいのドアを開け、フェイスマンはいささか憂鬱な心持ちで、それでも律儀に挨拶した。

「遅いっ！」

間髪入れずに銀のフォークが飛んでくる。

「うわっ。危ないじゃないか！」

何とかフォークを避けたフェイスマンの前に、左手に

スプーン、右手に食器磨き布を構えたハンニバルが立ちただかった。

「出てったつきり帰つてこない放蕩息子にはいい薬だろうが。」

帰つてこないフェイスマンやマードックの代わりに、銀の食器磨きをする羽目になったリーダーは、いたくご不快であらせられた。

「モ、モンキーは？」

「キッチンで包丁砥ぎだ。」

「で、ハンニバルが食器磨き？」

フェイスマンは壁に刺さつたフォークを抜きながら、溜息をついた。クリストフルのフォークだ。先がちょっとひしゃげてしまったが、上手く伸ばせばバレないだろう、多分。

「大体、こういうチマチマした仕事は、あたしにや向いてないですよ。」

「じゃあさ、ハンニバル。パーツと派手な依頼が来てるんだけど、そつち頼んでもいいかな？ これは俺が磨くから。」

「パーツと、派手な、依頼とな？」

食いついてきた！ フェイスマンは心の底でニヤリと笑つた。表情は全く変えないまま。しかし心拍数は一割増し。だって、フェイスマンの人生の中で、未だハンニバルを騙そうとして成功した試しはないんですもの。

「うん、そう、依頼。」

「依頼書にはそんな面白そうな依頼はなかったぞ。よそからの依頼なら、年内は無理だと伝えといてくれ。残念ながら年内はこのマンシヨンの仕事で手一杯だ。」

「違う違う、このマンシヨンの住人からジェイソンへの依頼だよ。依頼書に書き忘れたんだつて。」

「それなら早いとこ取つかからんと。どんな依頼なんだ？」

「えー、そうね、大勢の観衆の前でライトを浴びて、その、ゴニョゴニョ。」

「うむ！ そりゃあたしの出番すな！」

ハンニバルはキラキラと輝く笑顔で、フェイスマンに銀のスプーンと磨き布を押しつけた。

「で、どこの誰ですか、あたしを呼んでるのは？」

「一階のキムつて子。」

聞くなりハンニバルは、ハンニバルとは思えないような素早さでドアの外へと駆け出していった。

「……ゴメン、ハンニバル……。」

フェイスマンはそう呟くと、目頭を押さえて壁に面を伏せた。

ピンポーン。

ハンニバルはキムの家のドアチャイムを押した。

『はい。』

「ジェイソンの代理の者だが。依頼の件で来た。」

真面目に言つてはいるが、ハンニバルの心はウキウキ。最近、アクアドラゴンの撮影もなかったもんで。

『あら？ さっきの人じゃないの？』

怪訝な声ではあつたが、すぐにドアが開いた。

「あなたもジェイソンの代理人？」

「そうだ。あんたがキムさんだな？」

「そうよ。さっきの、あの、ひよろ長いハゲた人は？」

「ああ、モンキーか。包丁砥いでるよ。」

「あの人を呼んでくるように、さっきの、あの、ハンサムな人に頼んだのに。」

「ああ、フェイスか。俺の方が適任だろうつてことで、代わりに来たんだが。」

「適任？」

キムはハンニバルの頭頂から爪先までを舐めるように見た。そして、首を傾げる。

「……もしかして、あなた、ダンスお好きなのかしら？」

「好きだともさ！」

「本当か？」

「体力に自信は？」

「ありますともさ！」

無理してないか？

「リズム感はおありかしら？」

「当然でしょう！」

手拍子の合間に手をスリスリしてそうなんだが。

「……まあいいわ、入つて。」

面接は終わつたらしい。ハンニバルは家の中に通された。

レオタードに着替えることを余儀なくされたハンニバルだったが、何の疑問も持たず嬉々として着替え、自分の体型に気後れすることもなく颯爽とレオタード姿でリビングに姿を現した。(これ、マンガじゃなくてよかったね。)

無論、キムの目はハンニバルの腹に向いた。

「……大丈夫なの？」

「何が？」

御大はそんなことちつとも気にしちやいません。少なくとも、今は。

「……それじゃ、あなた(やっぱり名目覚えてない)、私と同じ動きをしてみて。ちゃんと音楽に合わせてね。最初は四拍ずつで行くわよ。」

「よし、やってくれ。」

非っ常々に不安でんこ盛りのキムだが、諦めたようにカセットデッキの再生ボタンを押した。

「イントロが終わったら始めるから、遅れないように!」

「……ワン・ツー・スリー、はいっ!」

「ワン・ツー・スリー、はいっ!」

見事にハンニバルはキムの動きを真似た。

「ワン・ツー・スリー、はいっ!」

それはしばらく繰り返し返された。……そして、曲が終わった。

「あなた、やるわね。」

「簡単さ、このくらい。」

ハンニバルの息が全く切れていないのに気づいて、キムは明るい顔になった。

「じゃあ次は八拍ずつよ!」

「どうぞどうぞ、八拍だろうが十六拍だろうが、受けて立ちますよ!」

コングが換気扇とガスコンロの修理を終えてキム宅を出ていき、入れ替わりにフェイスマンが空き缶潰しと窓拭きにやって来た。深夜に窓拭きってどうよ?

汗を煌かせ見事に踊るハンニバルを見ない振りをして、フェイスマンは黙々と窓を拭いていた。どうしても

視野の端に入ってしまうハンニバル、それは彼の知っている「Aチームのリーダー」ではなかった。彼の知っている「腹の出っ張ったオジサン」でもなかった。脂肪の下に隠れていた筋肉が躍動している。それに、あの笑顔ったら。相当、息が苦しいはずなのに、無理な動きを続けているはずなのに、ハンニバルの笑顔は明るく美しく、ちらちらと窺い見るフェイスマンの心さえも明るくさせた。キムもそうなのだろう、ハンニバルと同じような笑顔で踊り続けている。

ハンニバルがキムを軽々と片手でリフトしてポーズを決めると同時に曲が終わった。完璧なタイミングだ。思わず、フェイスマンは拍手をしていた。

「……はあ、はあ、あなた、すごく、素晴らしいわ! 最高!」

リフトから下ろしてもらおうなり、床にへたりと座り込んだキムが、ハンニバルを見上げて荒い息で言う。

「皆さん、そう仰いますよ。」

涼しげに微笑み、ハンニバルがクールに答える。

『ハンニバル、カッコいいよ!』

そう言いたいけれども言えないフェイスマン、無言のまま窓拭きに戻る。

「さて、キム、一休みさせてもらっていいかな?」

「ええ、どうぞ。」

すたすたと葉巻を取りに行ったハンニバル、リビングで一服、と思った途端。

「喫煙は外でお願い。」

ついつとキムは庭の方(そしてそれはフェイスマンの方でもある)を指差した。ハンニバルは、仕方ない、という風に肩を竦めて、庭に向かった。

「どうでした、あたしのダンスは?」

庭に続く窓を開けながら、ハンニバルは窓拭き男に尋ねた。

「まあ見られたね。」

その答えに、ハンニバルは鼻でフツと笑って、フェイスマンの肩をポンと叩くと、レオタード姿のまま庭に出た。